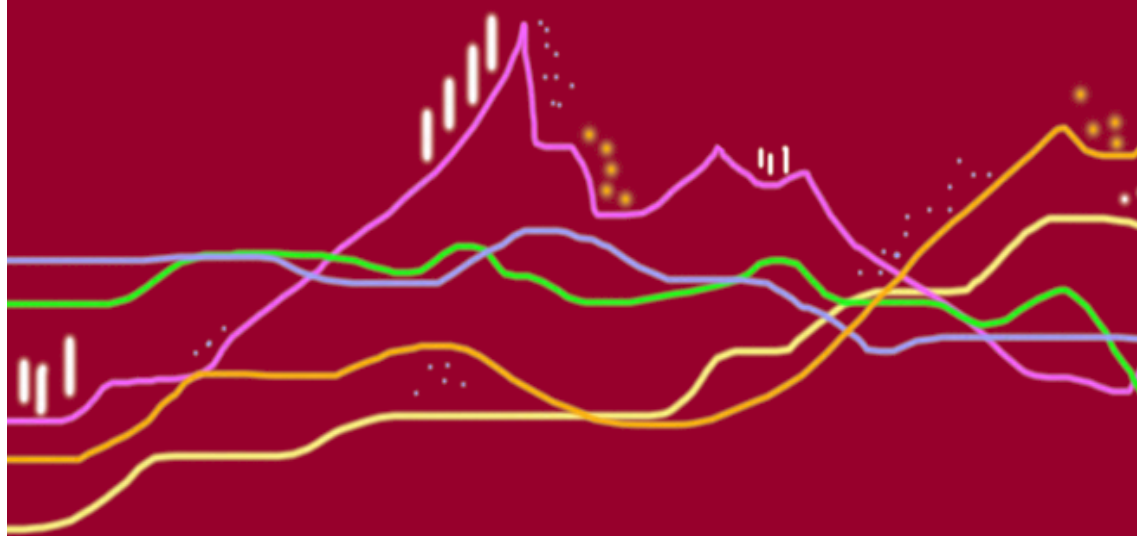


# MONITORING *the* FUTURE

## National Survey Results on Drug Use, 1975-2023: Overview and Detailed Results for Secondary School Students

Richard A. Miech  
Lloyd D. Johnston  
Megan E. Patrick  
Patrick M. O'Malley  
Jerald G. Bachman



Sponsored by The National Institute on Drug Abuse at The National Institutes of Health

**MONITORING THE FUTURE**  
**NATIONAL SURVEY RESULTS ON DRUG USE, 1975–2023:**  
**Overview and Detailed Results for Secondary School**  
**Students**

by

Richard A. Miech, Ph.D.  
Lloyd D. Johnston, Ph.D.  
Megan E. Patrick, Ph.D.  
Patrick M. O'Malley, Ph.D.  
Jerald G. Bachman, Ph.D.

University of Michigan  
Institute for Social Research

Sponsored by:  
National Institute on Drug Abuse  
National Institutes of Health

This publication was written by the principal investigators and staff of the Monitoring the Future project at the Institute for Social Research, University of Michigan, under Research Grant No. R01 DA 001411 from the National Institute on Drug Abuse.

The findings and conclusions in this report are those of the authors and do not necessarily represent the views of the National Institute on Drug Abuse or the National Institutes of Health.

*Public Domain Notice*

All materials appearing in this volume are in the public domain and may be reproduced or copied, whether in print or in non-print media including derivatives, in any reasonable manner, without permission from the authors. If you plan to modify the material, please indicate that changes were made and contact MTF at [mtfinformation@umich.edu](mailto:mtfinformation@umich.edu) for verification of accuracy. Citation of the source is appreciated, including at least the following: Monitoring the Future, Institute for Social Research, University of Michigan.



<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

*Recommended Citation*

Miech, R. A., Johnston, L. D., Patrick, M. E., O'Malley, P. M., & Bachman, J. G. (2024). Monitoring the Future national survey results on drug use, 1975–2023: Overview and detailed results for secondary school students. Monitoring the Future Monograph Series. Ann Arbor, MI: Institute for Social Research, University of Michigan. Available at <https://monitoringthefuture.org/results/annual-reports/>

Institute for Social Research  
University of Michigan  
Ann Arbor, Michigan  
Published January 2024

<https://monitoringthefuture.org/wp-content/uploads/2024/01/mtfoverview2024.pdf>

## 第2章

### 2023年の主な調査結果の概要

Monitoring the Future (MTF)は、今年で49年目を迎え、米国の青少年、大学生、若年成人、60歳までの成人による合法および違法な精神活性物質（薬物）/向精神薬の使用傾向に関する有効な情報として、米国で最も信頼されている科学的情報源の1つとなっている。過去40年間、この研究は、これらの青少年および成人の集団におけるそのような物質（薬物）の使用が増加し続けていることを追跡および報告してきた。

毎年発行される MTF シリーズのモノグラフは、疫学所見についての主要な報告である。1975年の調査開始から2023年までの調査結果は、49の全国学校内調査と47の全国追跡調査の結果であるモノグラフに含まれている。

MTFは、1975年以降毎年、(a)12年生、(b)1991年以降は毎年、8年生と10年生の全国的な代表サンプルの学校調査を実施してきた。さらに、1976年の学年から、以前に参加した各12年生の回答者の代表的なサブサンプルの追跡調査を実施した。これらの追跡調査は、現在65歳までの成人期まで続いている。このモノグラフは、8年生、10年生、12年生の学校調査の結果に焦点を当てている。またパネル研究の結果<sup>1</sup>に関する追加レポートは、19歳から65歳までの追跡調査に焦点を当てたものである。

MTFは、物質（薬物）使用および関連する態度における年齢、期間、およびコホートの影響を検出するように設計されている。

年齢効果(Age effects)は、複数のクラスコホートで見られる同じ年齢において同じようにみられる変化である。それらは青少年期に一般的にみられるものである。

期間効果(Period effects)とは、同じ暦年の複数の年齢層(この場合は、調査対象の8、10、12の3つの学年すべて)で何年にもわたって起こる変化である。

コホート効果は、クラスコホートとその前後のクラスコホートと区別し、そのコホートが年齢を重ねるにつれて継続して観察される物質（薬物）使用行動または態度を示している。

以下に、2023年の米国の8年生、10年生、12年生によるさまざまな物質（薬物）の使用に関する主な調査結果の概要を示し、各薬物トレンドの詳細は第5章に示す。さらに、3つの学年すべてを合わせた分析にも言及してある。これらの学年を組み合わせた結果は、夏に全巻が公表される際にこの巻の付録Dに表示されるが、それまでの間、これらの推定値は、プロジェクトのWebサイトの「3つの学年すべての組み合わせの表」という見出しの下に示してある。

調査結果は、COVID-19 パンデミックの発生前後の期間で明確に分けて示してある。2020年のすべての調査は、パンデミックの懸念から全国的な社会的距離政策が制定され、データ収集が停止された3月15日までに完了した。従って、2020年とそれ以前の結果はパンデミック前のものであり、2021年以降の結果はパンデミックの発生とそれに伴う国の対応の後に行われたものである。

1. Patrick, M. E., Schulenberg, J. E., Miech, R. A., Johnston, L. D., O'Malley, P. M., & Bachman, J. G. Monitoring the Future Panel Study annual report: National data on substance use among adults ages 19 to 60, 1976-2022. Monitoring the Future Monograph Series. University of Michigan Institute for Social Research: Ann Arbor, MI. Prior year versions are available on the MTF website. An updated version of this report that includes data from 2023—as well as results from respondents age 65—will be available on the MTF website in mid-August.

大麻、アルコール、ニコチン蒸気吸引 (Vaping) は、パンデミック発生後も使用レベルの低下が続いた。

このプロジェクトでこれまでに記録された最大の前年比減少のいくつかは、パンデミックが始まった年に起こった。例えば、2020 年から 2021 年にかけての過去 12 か月間の大麻使用（年経験率）の減少は、各学年で過去最大となっている（12 年生は 1975 年以降、10 年生と 8 年生は 1991 年以降において）。また、大麻とともに近年、青少年の間で最も一般的な薬物使用となっているアルコール使用とニコチン蒸気吸引にも記録的な減少が見られた。これらの知見から浮かび上がる大きな疑問の 1 つは、青少年の物質（薬物）使用レベルの低下が将来も続くかどうかである。2021 年のパンデミック時に薬物使用を混乱させ、減少させた要因は、長期的な影響を及ぼす可能性がある。これは、薬物使用がなかったことで、薬物使用を勧誘する仲間グループとの関わりが減ったような場合や、パンデミック中に薬物を使用しなかった青少年は、この期間に将来薬物使用に染まりやすくなるような心理的/神経学的変化を免れたような場合に起こり得る。あるいは逆に、2022 年に青少年が学校に戻ったとき、そしてその後、パンデミック前の社会的相互作用と薬物使用のパターンが急速に再確立されるようになると、物質（薬物）使用はパンデミック前のレベルに急速に反転する可能性がある。

2023 年の結果は、最も一般的な物質（薬物）に対する思春期の薬物使用レベルが、パンデミック発生後に観察された低いレベルを継続したことを示している。2021 年の大幅な減少以降、大麻の過去 12 か月間の使用（年経験率）レベルはほとんど変化しておらず、3 つの学年のいずれにも明確な方向性はなかった（詳細な推定値は別紙）。

12 年生の過去 12 か月間のアルコール使用（年経験率）のレベルは、2022 年に一時的に反転した後、2023 年には 2021 年よりもわずかに低くなった。8 年生の 2023 年のアルコール使用レベルも 2021 年よりもわずかに低い。10 年生の 2023 年のアルコール使用レベルは、パンデミック前のレベルを大幅に下回っているものの、2021 年よりもわずかに高くなった（10 パーセントポイント、すべてのアルコール推定値の詳細については、別紙）。

過去 12 か月間のニコチン蒸気吸引は、2021 年以降も 3 つの学年すべてで減少し続け、2023 年には 12 年生と 10 年生の両方で大幅に減少した（詳細な推定値については、別紙）。

### Delta-8: 青少年期の新たな薬物

2023 年の調査で初めて、MTF は 12 年生の生徒に「デルタ-8」の使用について尋ねた。デルタ-8 は、大麻(マリファナ)の主要な精神活性化合物であるデルタ-9-THC の変異化合物である。デルタ-8 とデルタ-9 はどちらも同様の酩酊作用を持っているが、法的背景が異なる。Delta-8 は米国連邦政府によって合法である。2018 年の農業改善法で合法化されたヘンプ（麻）から合成され<sup>2</sup>、この法律の成立以来、米国の多くの州でガソリンスタンドや

コンビニエンスストアなどでデルタ 8 製品がますます容易に入手できるようになった。依存症を含むデルタ-8 の潜在的な健康への影響は、現在のところ不明である。

2023 年の結果では、12 年生のデルタ 8 の過去 12 か月間の使用率（年経験率）は 11.4% であった（2023 年にその使用について調査したのはこの学年のみ）。成人のマリファナ使用を合法化した州ではこの化合物の使用経験率が低い。この結果は、通常のマリファナが比較的入手しにくく、手に入れにくい場合に、青少年はデルタ 8 を使用する可能性が高くなることを示している<sup>3</sup>。2024 年の調査では、今後の使用傾向をより適切に追跡するために、3 つの学年すべてでデルタ-8 に関する質問の数を拡大する。

### 他の注目すべき知見

2023 年では、青少年の薬物使用に関する追加の調査結果が注目に値する。大麻・マリファナ以外の違法薬物の過去 1 年間の使用は、パンデミック発生後の 2021 年に見られた低いレベルで継続して推移した。2023 年には、12 年生の薬物経験率は 7% で、2021 年以降は横ばいで推移しており、パンデミック前の 2020 年の 11% を大幅に下回っている。10 年生では、2023 年の薬物経験率は 5% で、2021 年から推移しており、パンデミック前の 2020 年の 9% を大幅に下回っている。8 年生では、2023 年の薬物経験率は 5% で、2021 年から推移しており、2020 年の 8% レベルを大幅に下回っている。

医師の指示なしの処方薬使用も、パンデミック発生後の 2021 年に見られた低いレベルで継続した。2023 年には、12 年生の過去 12 か月間の使用経験率（年経験率）は 4% で、2021 年から横ばいで推移しており、2020 年の 8% レベルを大幅に下回っている。（この測定値は 12 年生に対してのみの報告である）。医師の指示なしの処方薬使用は、アンフェタミン（覚せい剤）、鎮静剤（バルビツール酸塩）、ヘロイン以外の麻薬、または精神安定剤の使用を指している。2021 年に低下し、その後もレベルが下がり続けるというパターンは、これらすべての物質（薬物）で明らかである。

過去 30 日間のニコチン使用（月経験）は、2023 年に 12 年生と 10 年生の両方で大幅に減少した。この減少は、主にニコチン蒸気吸引の減少によるものである。

青少年でこれまでに薬物使用をしなかった者の割合（生涯薬物未経験率）は、12 年生で 38%（2022 年の 31% から）、10 年生では 54%（2022 年の 49% から）と大幅に増加した（生涯薬物経験率の低下）。これまでに薬物使用をしなかった者は、アルコール、大麻・マリファナ、またはニコチン（タバコまたは電子タバコのいずれか）をこれまでに使用しなかったこととして定義される。12 年生では、過去 30 日間にこれらの薬物の使用を行わなかった者の割合（月薬物未経験率）も 63% に大幅に増加した（2022 年の 58% から）。

一方、12 年生では、ADHD（注意欠陥/多動性障害）の薬物の使用が、2021 年から 2022 年にかけての前年の大幅な増加を維持した。ただ、2023 年には、ADHD 治療関連の覚醒剤または非覚醒剤のいずれかを服用したことがある 12 年生の割合は 14.6% で、2022 年に記録された過去最高を 0.3% ポイント下回った。

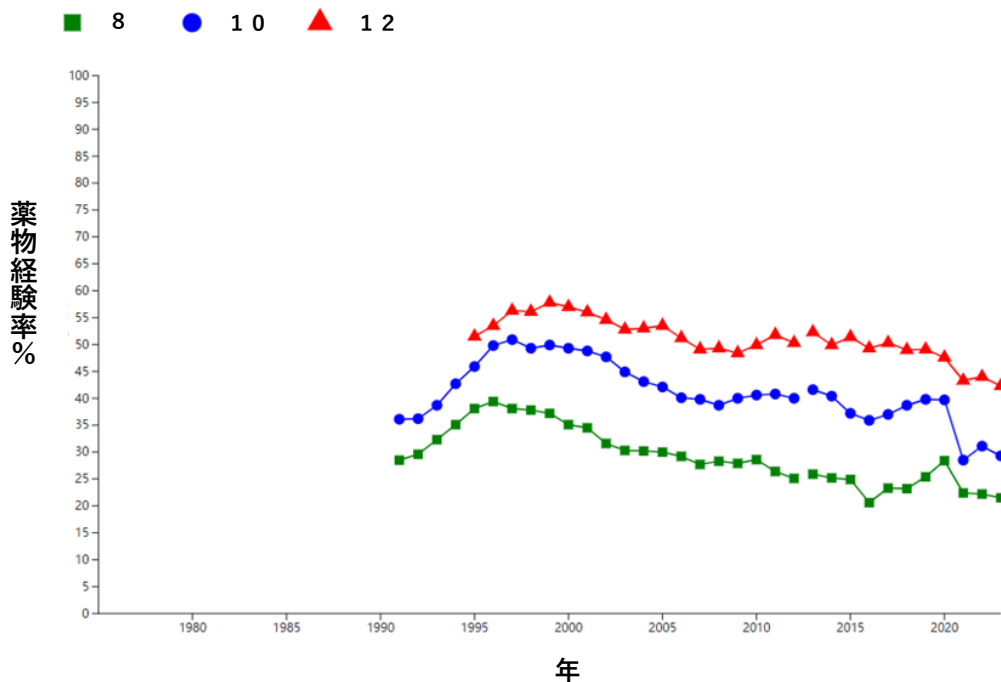
2. U.S. Department of Agriculture. Farm Bill. Accessed January 22, 2024.
3. For more detailed findings see Harlow, A. F., Miech, R. A., & Leventhal, A. M. (in press). Adolescent delta-8-THC and marijuana use in the United States. JAMA.



別紙

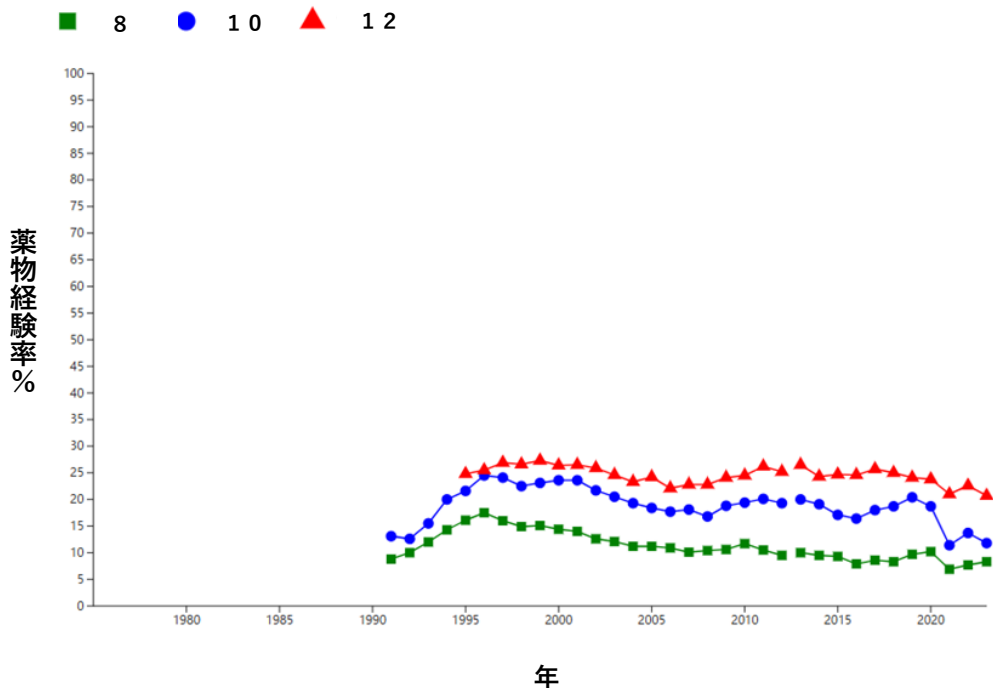
全違法薬物（吸入剤を含む）

生涯経験率：8, 10, 12 学年



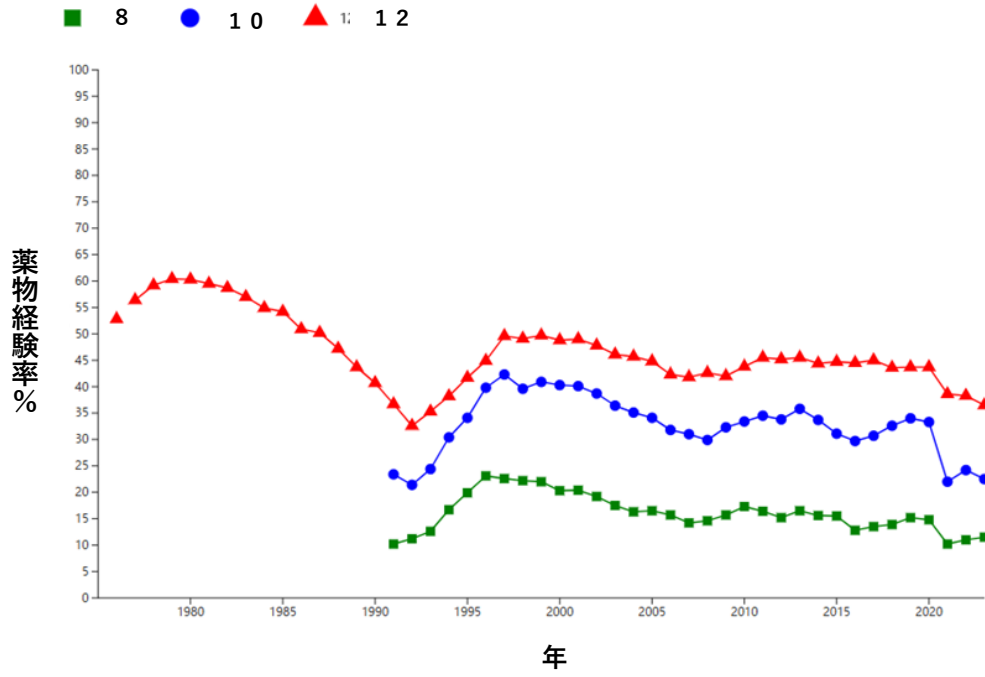
全違法薬物（吸入剤を含む）

月経験率：8, 10, 12 学年



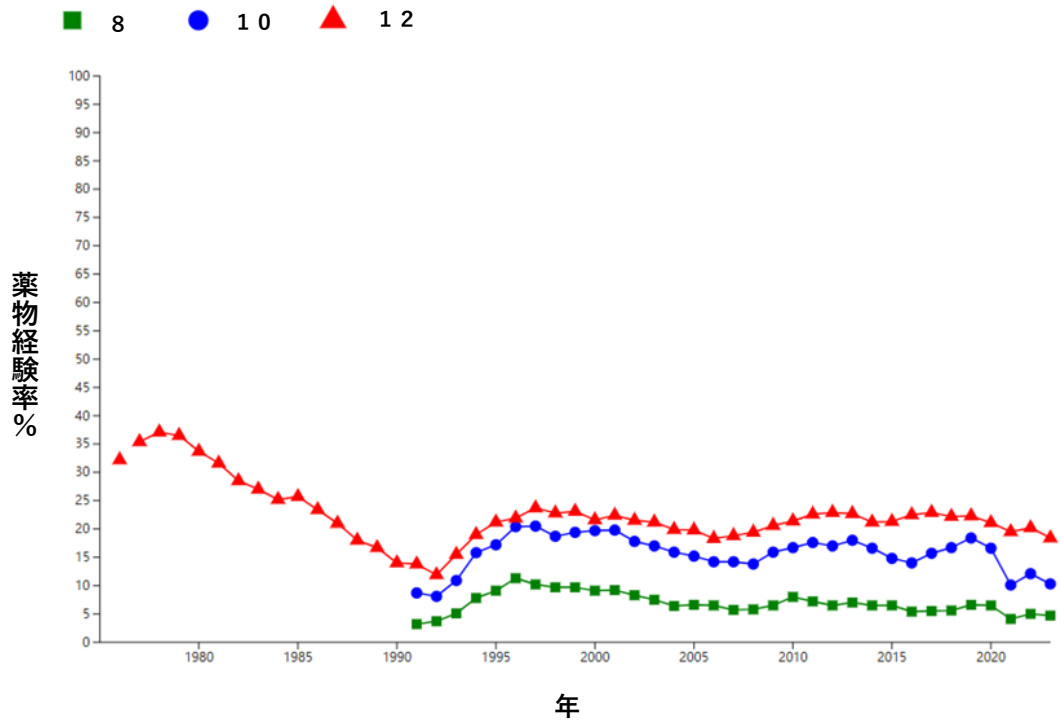
## マリファナ（大麻）

生涯経験率：8, 10, 12 学年



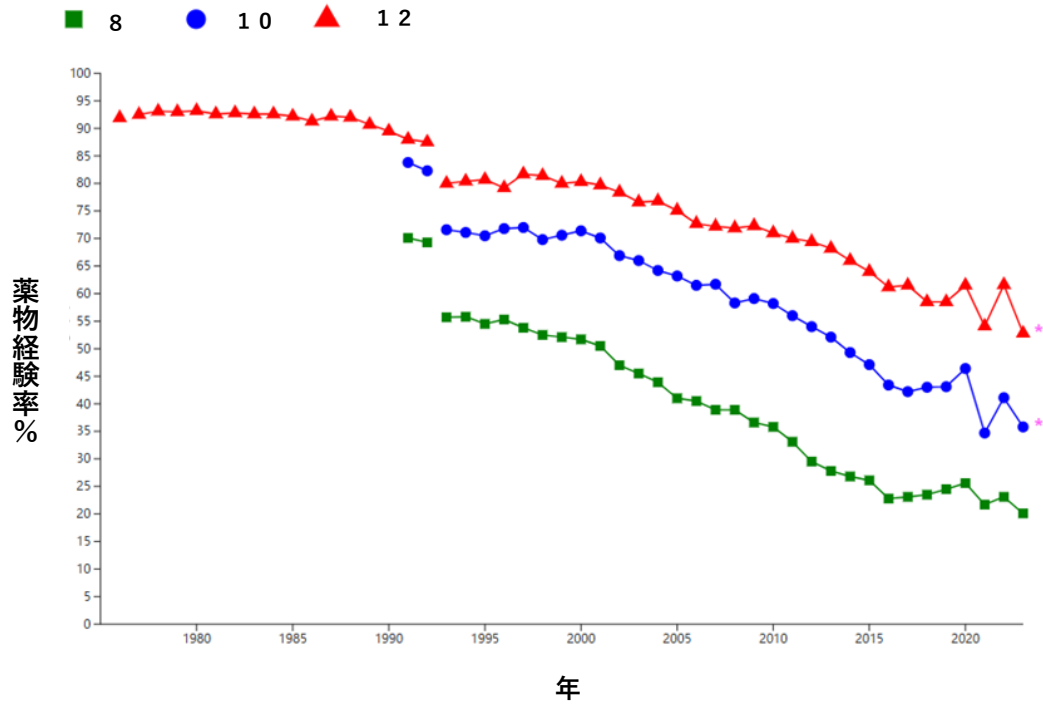
## マリファナ（大麻）

月経験率：8, 10, 12 学年



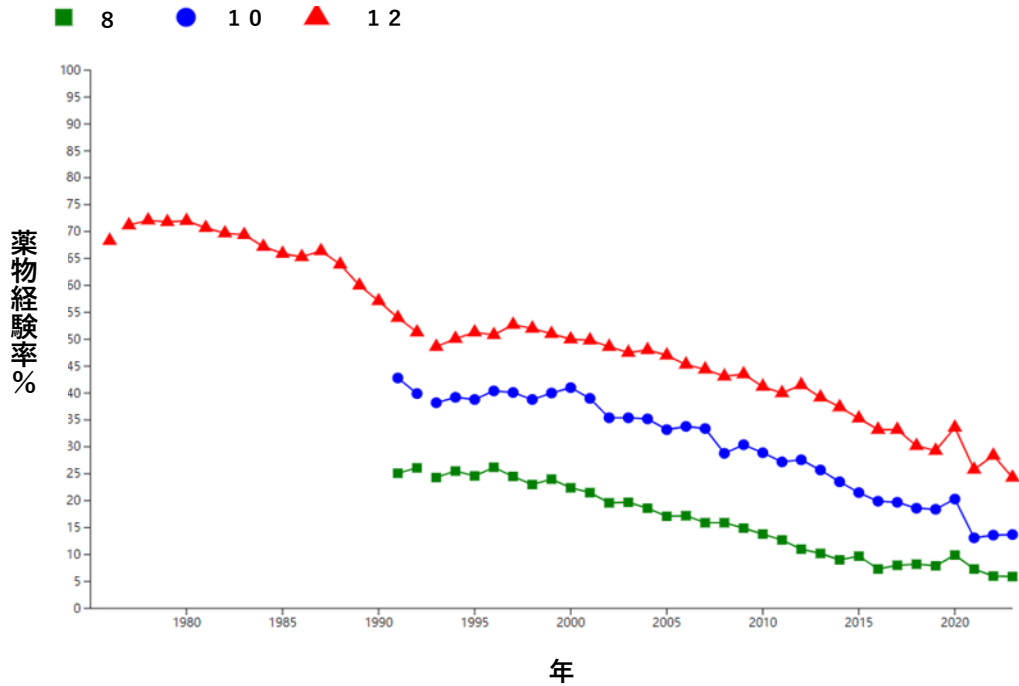
### アルコール（飲酒）

生涯経験率：8, 10, 12 学年



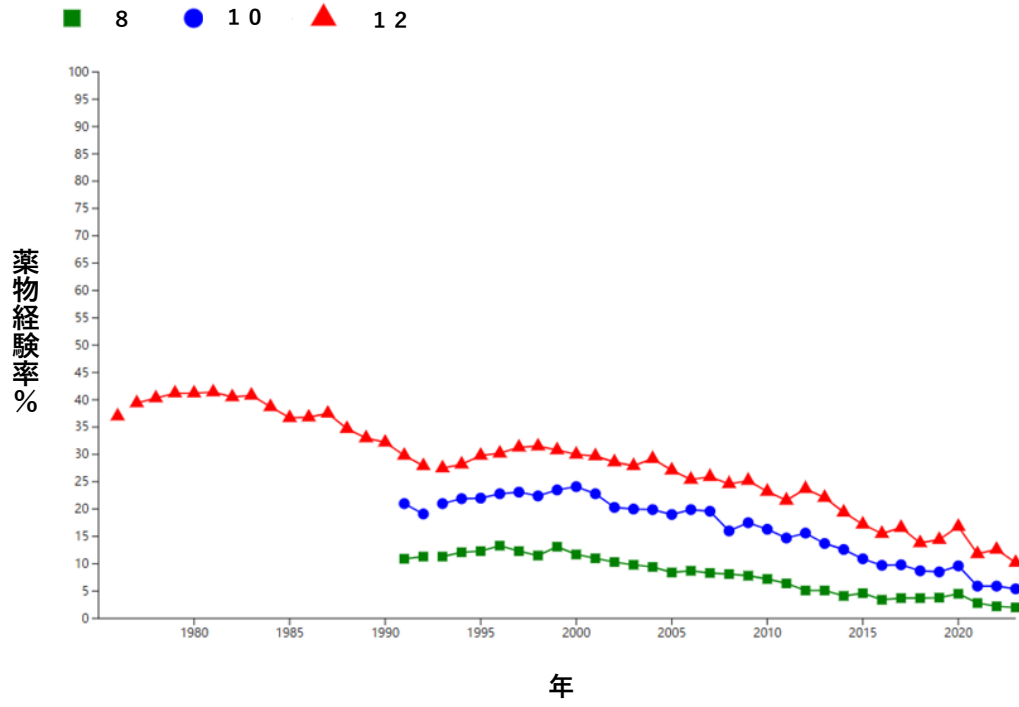
### アルコール（飲酒）

月経験率：8, 10, 12 学年



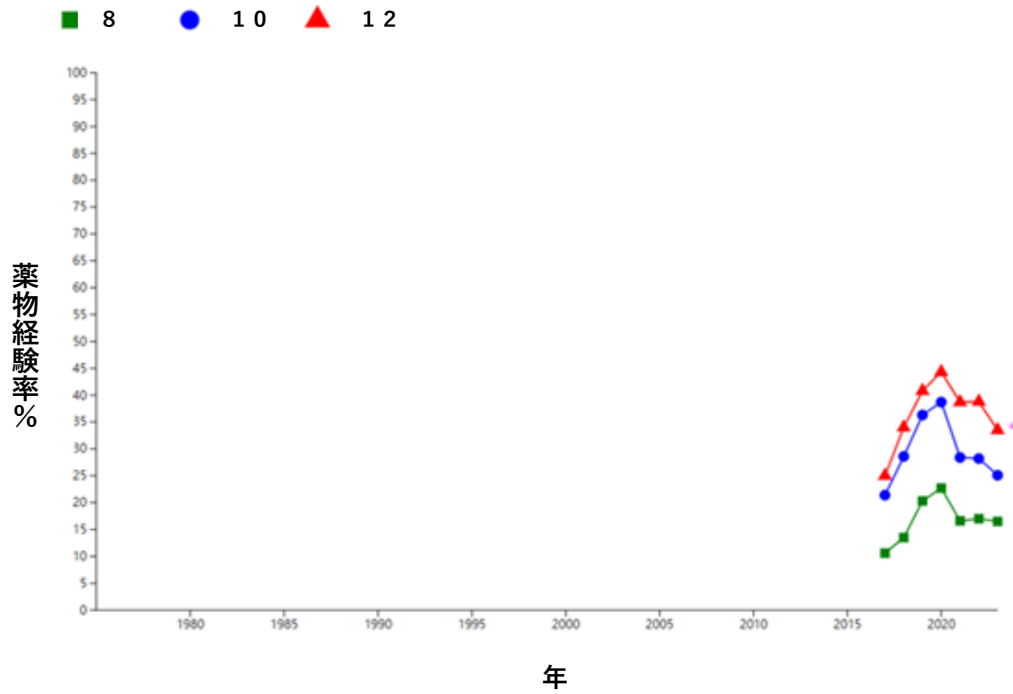
# アルコール（暴飲）

生涯経験率：8, 10, 12 学年



## ニコチン蒸気吸引 (E-シガレット)

生涯経験率：8, 10, 12 学年



## ニコチン蒸気吸引 (E-シガレット)

月経験率：8, 10, 12 学年

